

やすらぎだより

2
月
号

陽気で緑にあふれた生活 それがやすらぎ園です

コラム第128号

「ロボット隊長」

施設長 植田 誠



「これは調べてみる価値ありますね」

介護員責任者として、日々フロアの業務負担軽減や健康対策を考慮している彼は、すぐさま興味を示した。移動式リフトをはじめとする福祉機器の類には積極的に取り入れてきたと自負する私と彼でさえ、介護ロボットという代物にはこれまで懐疑的な目で見っていた。

介護ロボットを明確にする定義は存在しないが、近年我が国では急速に推進されていることぐらいは、業界のものなら誰もが知っている。今ロボットと言うと、おしゃべりする‘パルコ’から掃除機‘ルンバ’や人騒がせな‘ドローン’まで多種多様に馴染んではいるが、介護ロボットはそうではない。「介護は人の手で」という哲学だけではなく、価格そして実用性が充分ではないため浸透しているとは言えないのが現実だ。

そんな中、法人では昨年10月に「マッスルスーツ体験会」を開催した。主に腰をサポートする介護支援型のロボットだったが、多くのスタッフは興味こそ持つが‘開発途上’という見解で一致した。その体験会を主導したのが介護員責任者の彼である。以来、彼は別名「ロボット隊長」と呼ばれるようになった。

先日、その隊長と共に大阪での「介護ロボット研修」に参加する機会を得た。タイトルは「人とロボットが織りなす介護」、興味を得た冒頭の想いは隊長としての秘めたアピールなのであろう。

「マッスルスーツより使い勝手はよさそうです」

「何より腰痛対策に効果的ですよ」

「より良いロボットとして進化するためには現場の声が必要です」

隊長の矢継ぎ早な言葉とその表情から、手応えが感じ取れる。

『介護従事者の負担軽減に資する介護ロボット導入促進事業』という国の補正予算が、補助金目当ての勝手な胸算用として更に心を湧き立たせる。

‘新しもん好き’の私の心をくすぐらせたのは違いないが、急いで仕事を仕損じる。熟慮断行、互いに言いきかせながら見た見慣れぬ東の生駒山には、冬の夕日が美しく映えていた。



社会福祉法人やすらぎ会 実施事業

- 特別養護老人ホーム やすらぎ園
- 在宅サービス事業所
- 居宅介護支援事業所
- 訪問介護事業
- 訪問入浴介護事業
- 短期入所生活介護事業
- 在宅介護支援センター
- 天理市東部地域包括支援センター
- ケアハウス やすらぎ
- 介護予防関連事業
- グループホーム むつみあい
- 天理市ひとり暮らし高齢者世帯等見守り事業
- 低所得高齢者等住まい・生活支援モデル事業

